様式 C-7-2

自己評価報告書

平成　23 年　　5 月　　9 日現在

機関番号：　14301
研究種目：　若手研究（B）
研究期間：　2008～2011
課題番号：　20720003
研究課題名（和文）心の哲学と知識の哲学―近代イギリス哲学と現代哲学の比較を手がかりにして
研究課題名（英文）Philosophy of mind and epistemology

研究代表者
戸田剛文（TODA TAKEFUMI　　）
京都大学・大学院人間・環境学研究科・准教授
研究者番号：30402746

研究分野：哲学
科研費の分科・細目：西洋哲学
キーワード：心の哲学、認識論

１．研究計画の概要
近代哲学と現代哲学における知識概念の変遷及びその原因を研究する。
２．研究の進捗状況
近代の哲学者デカルトは方法的懐疑を経て、新しい基礎付けのもとに知識体系を打ち立てようとしながらも、その知識概念は、伝統的な「知識」（エピステーメー）概念であった。しかし、デカルトの認識論の影響を大きく受けた近代の経験論者たちは、近代以降急速に発展した自然科学の影響を受け、ロック、バークリ、ヒュームにいたる間に、より柔軟な知識概念を発展させていった。それは、現代の認識論で言うところの、認識論の自然化であり、言わば、われわれが可謬的な存在であることをその認識論の体系に組み込むことと言い換えることもできる。本研究では、そのように実際に、知識概念が軟化していく過程をまず再確認した。そしてひとつの典型として、ジョージ・バークリの知覚理論を取り上げ、どのようにして知識が生成されるのかという心理学的考察が、認識論に取り入れられた結果、その知識概念が変化していくことを明らかにした。
ついで、本研究では、現代の認識論に目を向け、そこにおいても、やはり近代と同じように、知識概念が変化していることをまず確認した。２０世紀初頭に大きな影響をもった感覚与件論は、経験論の影響を受けつつも、われわれの「観察」ということはそもそもどのようにして基礎付けられるのかという基礎付け主義の立場を採用し、そこに見出される感覚与件という絶対確実なるものをその基礎としようとすることで、デカルトがかつて抱いていたような、強い知識概念を所有していた。しかし、ゲティア問題を経て、知識の因果説や、自然主義が大きな影響を持つようになって、再び、知識概念は柔軟なものへと変化していった。そして、その過程には、知識生成のメカニズムをもつものとしての心の分析、いわゆる心の哲学が、脳科学に代表される自然科学の発展にともない盛んになり、認識論に大きな影響を与えたことが論じられた。
３．現在までの達成度
②
特に支障なく研究を進めることができたから。
４．今後の研究の推進方策
現代の認識論を研究するに当たって、プラグマティズムの影響をより詳細に検討する必要を感じているので、プラグマティズムの系譜の研究に力を入れる。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計 3 件）
1. “Change in Twentieth-century Epistemology,” *Menschenontologie 17*, 2011, pp. 87-98.
2. “Tansition of the Conception of Knowledge: From Descartes to Reid,” Menschenontologie 16, 2010, pp.117-128.
3.「直接知覚について―近代のイギリス哲学より」『人間存在論』第１５号, 2009 年, 29-39 頁.
〔学会発表〕（計　件）

〔図書〕（計　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕